

はあるだろうか。三日目にデッキの方で日本の漁船が
いるというので大騒ぎであった。

やがて舞鶴に着き、はしけで棧橋に上る。いよいよ
帰ったという気持ちになった。検疫を終わって風呂に
入った。満州西安の発電所の風呂以来である。そして
おかゆを食べた。こんなにうまいおかゆは始めてであ
る。二、三日いたような気がする。被服、靴、旅費、
カンパンを受け取り汽車に乗った。各駅停車なのでち
よつと走ってはとまる。シベリアでは駅と駅まで何時
間もかかる。時には半日も走り続ける。

松江駅に着いた。町は余り変わっていない。野津旅
館に行った。昔どおりだ。自分の家に帰ったようだ。
松江から隠岐丸で知夫里、浦郷、別府を経て菱浦だ。
皆が出迎え、我が家に帰った。工場のどこも変わって
いない、夢のようだ。父も母も家内も弟たちも親類、
近所の人も皆元気でいた。

昭和二十二年六月であった。

悪夢のシベリア

岩手県 折居 次郎

はじめに

今思い出してもぞつと肌の寒くなるあのシベリア抑
留の三か年。明日への命をつなぐにさえ乏しい粗悪な
少量の食事をむさぼり、ただ働かされ、そして寒さと
空腹に眠れぬ夜を過ごし飢えの毎日に耐えてきた。特
に二十年の最初の越冬のころはひどいものだった。

飯盒のふた一杯のかゆを毎日二回だけの日が続き、
酷寒の環境への不なれもさることながら、栄養の絶対
量の不足で次から次へと死者が出た。仕事の能率など
は論外で、生き延びた者は幸運と言うほかない。

次第に食事も改善され、病弱者は優先的に帰還し、
作業にもなれ過ぎてきた三か年だが、その間一回た
りとも満腹したことはなく、帰るまで飢餓感は続いた。
肉体的にはようやく仕事に耐えられるようになったこ

ろ、今度は例の民主運動が起きて精神的な苦痛に耐えねばならなかった。この運動は心の底から恐怖感と人間相互の不信感を強く抱かせた。そして日本人の無気力、便乗主義、裏切り、非良心、破廉恥などの醜い面をさらし、日本人は最低だと思い知らされた人々が多かったことを悲しむ。

粗悪な食糧は直接死につながり、非民主的にとらまれば、唯一の願望の帰還さえ絶たれかねない極限状態におかれた哀れな集団がシベリアにあった。よくぞ耐えて命を拾ってきたものだとの感を深く抱く。

応召から収容所まで

二十年七月末嫩江独立混成挺身隊に応召、帯剣だけを渡され、爆雷操作の演習を二、三日やっているうち、チチハル警備とやらで、手榴弾十発を腹に巻き、途中の停車時間を利用して手榴弾の使用法の説明を受けたが、使用法を納得したわけでもないままチチハル到着。

やがて終戦を知らされ、帯剣と手榴弾をソ連軍のトラックに投げ入れたのが武装解除だと知らされ、間もなくどこへとも知らされずに貨車に詰め込まれ、約半

月後に着いたところがクラスノヤルスク第三分所だった。以降丸三か年間機関車工場の第二期拡張工事に従事した。

最初の越冬

ここに着いたとき、収容するだけの建物が不足していたので、急拠宿舍が建設され、新しい建物に移転したため、材木や壁がまだ乾燥していないせいか、いくらベーチカをたいても室内は寒く、干草を入れたマットの上に毛布と外套をかけて寝たのだが、凍るほどでないにしても体のしんまで暖まることはなく、ウツラウツラと腹いっぱいいうまいものを食べる夢などを見ていた。

朝早く暗いのにゴソゴソ起きて、飯盒を持ち食事受領に出掛ける者が出始める。六時近いのだが、外は真つ暗やみ。食堂がないので食券を持って各自が飯盒にもらい宿舍で食べる。今朝はだんこの数が多いとか少ないとか、今日のおかゆはコッテリしてるとか、水っぱいとか、こんなことが抑留者たちには最大の関心事であり、直接生命にかかわる重大事だった。早い方が

盛りがいいとか、締め間際がいいとか、こと食事に関する話題は際限なくあるのだが、みんな真剣に取り組んだ笑えない事実だ。隣と比べて盛りのいいと感じたときは、一日寿命が延びたくらい得をしたような気がして一日中元気が出たが、少ないと思った日は反対に一年も寿命が縮んだ思いで、一日中ひもじい思いで過ごした。同じ器で配分するのだから多くても少なくても大差ないのだが、毎日々々毎食々々多いか少ないかが気になる餓鬼道の世界だった。何しろ生きて帰れるか、死んで白樺のこやしになるかがこの食事にかかっていたので、たかが食事のことであさましいなどと言いつける問題ではない。命にかかわる最も重要なことだった。

遠い作業場に行くときは昼食も朝渡されるが、これとてウツカリ雑のうに入れたりすると、いつの間にか消えてなくなっている。入手した食物の貯蔵法の最も安全確実なのは直ちに自分の腹に入れる以外にない。従って二食分は直ちに腹の貯蔵庫に入り、必要もないのに空の飯盒だけは腰にぶら下げて作業場に行き、昼

食は水を飲んで終わる。

作業（当初のころ）

七時に外に並ぶ。冬のシベリアの夜は長く、外は真っ暗でピリピリする寒さの中だ。門前にて人員点呼が始まるのだが、五列に並んでも十列に並んでも、ラス、ドアー、テリーと数えるのだが、一回で済むことはまず皆無。何回も何回も数え直すが決まらない。足踏みをしながら寒さに耐えて我慢しているのに、時間がかかる。この人員点呼の苦汁はどこの収容所にも共通した定評ある馬鹿らしさであった。

二キロぐらい歩いて作業現場に着くのだが、まだ明るくならない。まず作業道具を受け取ることになるのだが、これまた勘定に時間がかかり過ぎる。ラバート二十、キルケ二十、ピラ五、タポール五等と受け取るのだが、長い時間がかかり過ぎて、八時の作業開始に間に合わないこともしばしば。

九時ごろになりやっと手元が見えるようになり作業開始だが、栄養失調の身では立っているだけでも精いっぱい、ウロウロしているうちに昼になる。一時より

またヴィストレー、ダワイ、ダワイと騒がれながらも三時ころにはまた手元が暗くなり、照明のあるところ以外は開店休業の状態となる。しかしロクに働いたわけでもないのに、あたりが暗いのでまるで深夜の残業作業でもしてるみたいで、疲れ切つて五時を待つ。やつと発電所のクドーク（汽笛）が鳴り響くのを待ちかね道具を返納するが、また員数点検に手間がかかりイライラさせられる。

疲れた足を引きずり帰り着いた門の前でまた、ラス、ドアーと点呼が長々と続く。毎日のことでウンザリする。やつと解放されるや、その足で炊事場に急ぎ、また中味のことや量の多少をオカズに少ない夕食を飯盒の底まで丁寧になめて横になり、またもや飽きずに食物談義に花を咲かせ、シラミと一緒に寝につく毎日が続く。

近い小便（最初の越冬のころ）

食事の量が足りないで、たいして働いたわけでもないのに疲れ切つた体をシラミと一緒に横たえ、毛布と外套をかぶり寝たふりをするのだが、シラミのモサモ

サと空腹のせいが目がパッチリさえて、なかなか眠れず隣と食物談義を生つばをのみこみながら延々と毎日繰り返し繰り返し続けた。

そのうちウツラウツラしたかと思うころ尿意を感じ、外套を着、靴をはき二重の戸を開けて寒い戸外の便所に急ぐのだが、十メートルくらい離れた便所に行き着く前にもれそうになる。あわてて歩きながらポタンをはずし、シャーシャーしながら五、六歩くらい歩いて引き返す。毎回便所まで行き着くことはなかった。

食事の量の少ないのを補い満腹感を味わうために水やお湯を必要以上に飲む。このため室内の寒さで熟睡できないのと相まって尿の回数が多くなり、夜中外に出たり入ったりして体の暖まるひまもなく、ぐっすり眠つた夜もなく、ますます体を消耗させた。

満州やシベリアでは立ち小便すれば棒になつて金づちで砕いた話を聞かされたが、実際は棒にはならない。が、地面に落ちると、ちようど仏壇のロウソク台に流れ固まったあれのように凍つて重なる。遠くまで流れて広がることはない。歩きながら流された小便は宿舎

の入り口から便所の方まで、まるでろうで舗装されたように白い氷の道が続いた。だれも見えていない暗い中だからおれ一人くらいと思っていたが、実はみんながやっていたので、見事な舗装道路ができたのだ。

忘れられる恐怖

真つ暗やみの中を出て真夜中(ほんとうは五時だが)に帰る毎日が続いているうちに、足が重くなり、はれが目立つようになったので、医務室にいくと腎臓が悪いので入院といわれ、即日テントの病室に入院した。

どうにか命を長らえて日本に帰りたいと懸命にそれだけを願い体を大切にできたはずなのに、急造のテント病室に入った途端、むくみがひどくなり動けなくなってしまった。まぶたも重なり物を見るにも手で目を広げて見るようになり、もうこれで終わりかと無性に寂しさに襲われた。毎日々々テントの穴を眺めながら、この広いシベリアの中で、自分が今ここにいることを知っているのは自分自身とソ連当局者しかいないという底知れぬ不気味さと、このままだれ一人知る人もないままこの地に果てて雪の原野に放り投げられ、

オオカミの餌になることをだれにも知らせることができない悲しさ、この世からこのまま抹殺され、忘れ去られるのかと思うせつなさ、せめてここで死んだと日本のだれかに伝えてほしいと願ってもかなえられないむなしさ。これは抑留者のだれもが一度は味わった最も恐れた悲痛な思いだ。そしてやるせなさにおののく毎日が続いた。幸いにも春の訪れとともに危うく命拾いをして退院できた。

この入院中に同室の多くの栄養失調患者は次々に毎日々々、日本の家族にも親しい友人にも知らされることなく、シベリアにいたことさえ忘れ去られ、この世から抹殺され、シベリアの雪原に捨てられ、オオカミの餌になり、魂だけ日本に帰って行った。いや、いまだに魂は自分の存在を主張し続けて、シベリアの原野をさまよっているのかもしれない。明日は自分の死ぬ番だと覚悟を決めていたせいか、隣の人が朝冷たくなっている、別段悲しい重大事件が起きたとか、かわいそうだとかの感情は全く起こらなかった。

いずれみんなこうなる運命の下にいたのだからだろ

うか。それにしても死者の霊をあつく弔うのは、日本ばかりでなく常識であるはずなのに、八百人ともいわれた当収容所で、死者のために墓づくりの使役に出た者がいかなかったことは墓をつくらなかったからで、そのまま裸で雪原に置き去られたとしか思われぬ。もちろん酷寒の地とて冬は墓を掘るのが困難だった事情は理解できるとしても。

三年目ごろの状況

三回目の冬を越し収容所内の諸施設も整備されていたし、給与も良好とはいえなくも、体力も回復し、いつ帰れるかの当てもないのだが、すでに第一次、第二次の帰還者を送り出していたので、あの入所時の絶望的な恐怖感もいつかは帰る番がくると、かすかながら明るい希望も持てるようになり、体をいたわりながら、だれのためとでもなく、ただ働き、食べると眠るのを楽しみに帰れるその日の来るのを待っていた。

だれのために働いているのか、時々そんなことを考えることもあったが、そんなことはどうでもいい。今の自分はこうして毎日を生き延びる以外に日本に帰る

ことができないのだ、こうして一日々々を生き抜き帰る日を待つのだ、と自分に言いきかせて過ごす毎日だった。

当初なれない仕事の上、命を支えているのがやつとの弱り切った体力では能率が上がるはずもなく、ノルマに追いまくられ、文字どおり地獄の生活の連続だったが、三年目ともなればそれぞれの仕事の要領もわかり、いろいろな業種に精通して一流の職人の技術を身につけ、作業は現地ソ連人を含め抑留者主導で進められるようになっていた。ここの機関車工場も当初、時々たましか見られなかった完成車が續々送り出されるようになった。

民主運動

シベリア抑留の話には必ず出てくる忘れられない民主運動がある。肉体的に弱り切つてようやく命拾いをして、ひたすら帰還の日を夢みてその日を過ごしていたとき、新たに襲ってきたのが、この精神的な恐怖である。

旧軍隊のあの私的制裁の恐ろしさはだれしも知ると

ころだが、それにも増して恐ろしかったのが民主グループの活動である。不当につるし上げられているのを弁護する勇氣を持つどころか、反対にみんなと一緒にそのつるし上げに同調せねば、すぐに自分がつるし上げられる恐れのある異常な世界がそこにあった。

裏切り、密告、悪意、脅迫、人間性の無視などが日常まかり通るのだった。ために多くの人々はみな心の底から（いや魂の奥と言ふべきか）の恐怖感と孤立無縁の相互不信に陥るのだった。（今でも人間不信の念を抱き続けている人がいる。）自らの体を傷めて入院して煩わしさから逃れ、可能性ない逃亡を実行してつかまり監獄に入れられて、久しぶりに安住の時を得たと喜んだ人もいる異常な収容所となっていた。

この中で一般の人は集会には努めて参加し、子供だましの幼稚な論議をばかばかしいと思ひながらも、黙ってその場の空気に同調し、労働歌に声を張り上げ、相づちを打ち、手を上げ、そうだ、そうだと叫び、ひたすら身の保全を図り、ともかく何としても帰還する日までの我慢と、歯を食いしばり耐え抜くほかになかつた。

た。

ダモイ

ある日、昼近く作業場に情報将校が来て、ダモイだ、すぐ帰れと言われた。二十年九月日本に帰ると貨車に押し込まれシベリアに連れて来られてから、幾百回、幾千回ダモイと聞かされ、その都度裏切られ落胆し続けてきたのだから、またかと聞き流したいところだったが、そろそろ自分たちの番が来るのを期待していたころだったので、本当かもしれないと思ひながらも、根強い長い間の不信感が、心の中でまた他の収容所移転かもしれないと半信半疑にさせる。

ともかくせかせかれ長い間一緒に働いたソ連の人たちと別れの挨拶をする間もなく、宿舎に帰り、身の回り品とて何もない身軽さ、直ちに駅近くの他の収容所に着き、ここで着ている衣服全部新品と着替えさせられ、初めて本当らしいと、貨車に乗り込みナホトカへ出発した。貨車に乗り込んでも本当のダモイかと一抹の不安は根強く残っていた。この先で残留になった話を聞いているからだ。長い間だまされ続けてきたのが

身について離れない。船に乗るまで安心できない。

ナホトカに着いて驚いた。ただただ目をみはるばかりの情景が展開していた。狂気の沙汰とはこんなことを言うのだろう。毎日々々集会とデモの連続である。

身についた人間不信が目をさまし、隣にも友人にも心を開かず、ここで取り残されてはと、懸命に声を張り上げ、手をふり、歌って踊って同調し、無事に地獄の門を出て波止場にたどりついた。

船の日の丸を仰いだときはさすがに胸がジーンと引き締まった。名前を呼ばれたときのあの安堵感、タラップを登るとき足の軽さ、有頂天とはこのときのための言葉だった。船上で「ご苦労さまでした。」と迎えられたときは「助かった。」と涙があふれ声も出なかった。みんな同じ感動にひたっていた。

日本が見えるぞと朝もやの舞鶴を無言で眺め「やっと助かった。」と再確認の胸をなで、三年間のシベリア生活が走馬灯のように頭の中を駆け回った。夢に見続けた日本に今来たのだ。あの言い知れぬ孤独感と、この世から抹殺されるかと恐れたあの底知れぬ恐怖感

から今やっと解放されたのだ。それにしてもよくぞ命を拾って来れたものだ、生きてる幸せをかみしめるのだった。

帰って来たが

故国の人たちも山河も温かく迎えてくれたが、体力、気力を消耗してしまった人たちの中には、帰国間もなく他界した人も多く、壮年の人とて大切な時期をあたからシベリアで過ごしたため、社会的立ち遅れはもとより、婚期を逸したり、妻を失って再婚し高齢で幼い子供のいる家庭も多い。こんなあんなでいろいろなこと多かったシベリア抑留である。

一部の人たちには恩給などもあったろうが、一般多数の人は生活の保障もなく、その日から厳しい生活に立ち向かわねばならなかった。

岸壁で帰らぬ子を待ち続けた母も、陰膳をすえて無事を祈り続けた人々も、願いもむなくその消息すら不明で、多くの人々が泣いた。

前途に光明を失い、心の底から襲われた恐怖感、そして孤独感、それにも増して根強く残る不信の感情、

生と死との向き合った地獄の毎日、あの狂乱の民主運動、それらの渦巻くシベリアの地獄から、からくも命拾いをして帰還した人たちは、あの極限状態の中で日本人がどのように行動してきたかを身をもって経験して来ている。

今でこそいろいろ批判できるものの、シベリアでの出来事は経験した人のみ知った多くのことがありすぎた。そしていかなることがあろうとも、二度と再び人間を極限状態に追い込むようなことになってはいけないと肝に銘じているに違いない。そこには常識で判断できない悲しいことがたくさん起こるからだ。

終わりに

有史以来経験したこともないことに初めて遭い、この世の地獄シベリアから命からがら帰れた人たちは、いろいろな苦難の十字架を背負ってきた。

国を信じ、身を挺して捧げた真心も無惨に砕かれ、強制抑留されたシベリアで、勝っても負けても戦争はみんなを苦しめているんだと、お互いに戦争を憎まねばならないと心に誓うのだった。平和に暮らしたい。

戦争などは絶対ご免だと心の底から叫びたい。

それにしても、望郷の念を抱きながらも、不幸にしてシベリアの雪原に身をさらした多くの人たちの無念さと思うと胸が痛む。だれが悪かったのか、どうすればよかったのか。せめて死んだ人たちの状況をいつの日か日本にたどり着いたら、家族の人たちに伝えたいと当時は思っていたのだが、記録は一切許可されず、思い出そうにもシベリアボケの記憶には全く浮かんでこない。本当に申しわけないと思いながらも、お許しを乞う以外今となつては方法を知らない始末だ。

ともあれ幸運にも命を拾って帰った人たちの一日も長く、シベリアでの空白を埋めてなお余りある楽しい老後を続けてほしいと願うことしきりである。

そして不幸にも日本に帰れなかった多くの人たちの霊に改めて心より深く深く合掌し、ご冥福をお祈りし、断片的なシベリア記をとどめる。